

愛宕山麓の小集落・清滝のふるさと再生への可能性を求めて

—「でたもの」の聞き取り調査から—

亀岡 FS 特任研究員 豊田 知八

はじめに

「このままでは集落も 20 年と、もたない…」
清滝住民のこの一言から、私は先祖の地である故郷清滝集落と向き合うことになった。京都市右京区嵯峨清滝町は、保津川と支流・清滝川の合流地点（落合）から約 2km 上流部に位置する渓谷沿いに点在する集落である。

「ほととぎす 嵯峨へは 1 里 京へは 3 里
水の清滝 夜の明けやすき」と歌人・与謝野晶子に詠まれ、愛宕山系から流下する水を集め、裾を流れる清滝川畔は、夏の納涼避暑地としても知られ、また京都屈指の紅葉の名所といわれる景勝地だ。現在の集落が形成されたのは江戸



写真 1 紅葉の景勝地で知られる嵯峨清滝の風景

時代前期こと。「火伏せの神様」として日本各地に広まった愛宕山岳信仰の参拝者が利用する参道の宿場まちとして、旅館や料亭、茶店を営む人たちが移住して開けた。近代には嵯峨嵐山から清滝間に愛宕山鉄道（昭和 4 年 4 月）が敷設。続いて愛宕山頂間もケーブルカー（昭和 4 年 7 月）が整備されたことで清滝は大いに発展する。特に、山頂の愛宕駅周辺には当時では珍しい水洗トイレ完備の近代的なホテルや旅館、大規模遊園地にスキー場といった観光施設が建設された。その頃の愛宕山には参詣者以外にも、時代の最先端観光リゾートエリアを楽しむレジャー客で溢れ、「地上の楽園」とも呼ばれるなど有史以来の賑わいをみせ、その影響で山麓の清滝川畔に建ち並ぶ旅館や茶店も大いに繁盛した。またその頃、清滝川の美しい流れや四季折々の趣ある里の風情を好んだ文筆家や文化人、学生などが来遊し、創作にふけ、宴に興じ、幾多の物語を綴ってきた。

しかし、第二次大戦の激化にともない、愛宕山鉄道が不要不急路線として鉄道は廃止、戦後も復活されることなく廃線となり、アクセス手段を断たれた観光地・清滝は愛宕山信仰参詣登山者が減少した。また温泉ブームなどの新しい観光スタイルの変化にも対応できず、参道に 31 軒あった旅館・料亭や茶店は戦後、次々に廃業に迫いやられ、観光地としての機能は著しく低下していく。また、もう一つの生活の糧であった林業の仕事も減少したことで、集落は経済基盤を失っていく。さらに勤労世代や若年層の都会への人口流失も起こり、高齢化と過疎化現象が進む集落は衰退の一途を辿っている。住民からは、今後の集落存続を危惧する声も上がっているが、高齢者が大半を占め、後継者世代が乏しい清滝集落には、この状態に歯止めかける有効な手立てもなく、なすすべがないというのが現状である。

私は同地を故郷とする者として、現住民が話す集落消滅の危機的現状を知り、同地の存続可能な機能

回復を目指す活動をする決意した。それは故郷を捨てて「出た者」、離郷者家族の者としての先祖伝来の地への責任感と自己存在の精神的原点喪失をという強い焦燥感の発意だったといえる。地元から頼まれた訳でもなく、集落内部からの再生気運も未醸成の中で「集落存続のために行動を起こさずにはおれない！」という強い自覚が、高齢化が進む故郷への半ば押しかけ型の関わりを決意させた。まずは、これまで手付かずにあった「集落の歴史の変遷と人々の暮らしの記録」の調査整理を手始めに、今、集落が抱える問題点や課題などを明らかにし、その対応策として「集落再生」の核となる地域資源の発掘を進めることで、「観光再興」を見据えた内部発生的な活性化活動が集落に生まれることを期待した。

だが、その視点は集落住民の望む思いと大きく乖離した考え方であることを、その後の聞き取り調査により思い知らされる結果となる。

私自身にとって故郷へ聞き取り調査を行うことは、途絶えていた故郷の地と私の精神的なつながりを再興させ、地縁ある人々との出会いと関係理解を深めることに大いに役立ったと実感している。その関係性を深める中で「愛宕詣りという観光で生まれた集落の再生は、観光の再興により生まれる」という固定概念による、故郷再生へ取り組もうとした私の思いも大きく変化していくことになる。さらにその気づきは、現在、日本各地で推進されている観光を軸とした地域活性化計画が、今後の我が国が進むべき姿として本当に正しいのかという疑問まで抱かせた。

私の清滝への関わりは、始まったばかりの活動であり、目に見える形の実践的活動にまでは至っていないが、ふるさとへの恩返しなどという甘く魅惑的な言葉では語れない「ふるさとの死守＝自分のアイデンティティの死守」という自己存在の源・精神の覚醒を呼び起こしと、護り、維持させねばならないものの大切さを私自身に自覚させた。この報告書は離郷して他所に暮らし、故郷へ無関心だったひとりの「でたもの」が、故郷の危機を知り、自己のアイデンティティが覚醒したことによる行動の記録であり、心の記録だと思っている。まだ道半ばの取り組みであるが、都市集中型社会の進展著しい時代にあって、生まれ故郷を喪失しつつある現在人への、「出た者」が起こした実践活動からの一提案になればと考えている。

1. 清滝の概要と現状 そして歴史

1.1 地理的概要

清滝集落は、京都盆地の西北部・愛宕山東麓に位置する京都市右京区嵯峨地区に属し、清滝川谷合の清滝町他 12 町から構成される山中の小集落。町内はその 95%以上が山間部であり、居住地は主に清滝川兩岸の平野部に限られ、清滝川金鈴橋から渡猿橋までの約 500 メートル間の清滝町に民家が集中している。そこが平安時代から愛宕山で修行する修行者の登山口でもあり、清滝川は愛宕信仰において「俗から聖」へと身を清める水垢離場としての性格も兼ねていた。

1.2 人口動態の変遷と現状

江戸時代に愛宕山信仰の参詣者が訪れる「宿場まち」が形成されて以来、昭和初期に愛宕山を中心に大規模な観光開発が施され隆盛を極めたが、現在は町内住民の過疎化と若年層の流出による過疎化の進展が著しく、後継世帯が皆無であることから近い将来、町内消滅の危機にある。昭和 25 年の市人口統計資料によると世帯数 34、総数 161 人、20 歳以下が 45%を占めていた。戦後は軍隊服役帰還者も加わり 41 世帯、総数 184 人を示し、戦後のこの頃が一番、人口が増加した時期である。しかし、昭和 45 年を境に世帯数 32、

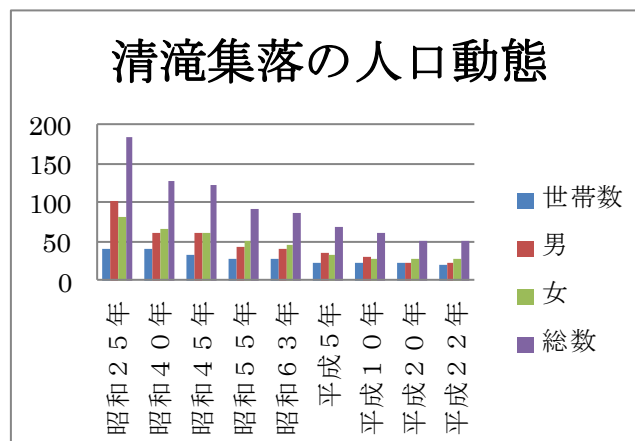


図2 清滝集落の人口動態表
出所：京都市統計

総数 122 人と減少がはじまり、昭和 55 年には世帯数 27、総数 93 人となり 100 人台を切った。バブル期には旅館業の増収が上向き、世帯数も 29 と一時的に増えたものの、人口総数は 86 人と減少しており、高齢化が進む兆しを示している。平成 22 年現在では、22 世帯で、人口総数 50 人と減少の一途を辿っている。そのうち 60 歳以上の住民が約 90%を占めるに至り、特に昭和 45 年には総数で 33 人もいた学生子ども層も今は皆無となった²。

(1) 遅れたインフラ整備

高齢者住民の重要な足となる交通機関は私鉄系バスが唯一運行されている³。わずか 21 世帯しかない集落で毎時間（午後 8 時最終）2 便のバスが運行しているのは、愛宕山登山者やハイキング客の使用を見込んでのことであり、その点では同様の問題を抱える他地域に比べると恵まれた環境にあるともいえる。しかし、午後 8 時以降の便はなく、JR 嵯峨嵐山駅から約 3 キロもある山間の集落では、結局、自家用車に頼る比重が多くなることから、京都、大阪圏に勤務または学校へ登校する条件としては不便さを否めない。この点をもても、峠を一つ越えた交通アクセスが充実している嵯峨地域へ住居移転するという発想が生まれやすく、新規転入者が見込めない現状だ。

また、山峡という地形的条件や住民減による費用対効果の低さから、未だ下水道未整備地区であり、この状態は観光客を受け入れる旅館や茶店などにとっては、環境面や衛生的からみて致命的であり深刻な問題となっている。2005 年には、京都市内の開発会社が温泉開発許可を取得し、動力装置により地底 1 千 m まで掘削工事に着者し、温泉噴水に成功した⁴。しかし、もともと建ぺい率が低い上、高額な浄化槽設置工事を必要とするため、設備投資するに見合わないとの判断から撤退した。以来、投資価値の低い土地として、観光施設の新規参入を躊躇する業者が多いのが現状だ。

(2) 住民の求める意識と国際化の影

現在、日本各地域で「観光」を地域振興の柱に据え推進する市町村が多い中、60 歳以上の住民が 90%を占める同地の住民は「集落の再生や活性化」ではなく、デイサービスの充実など日々の生活の

² 京都市統計資料 京都市役所市民情報センター資料

³ 京福電車系列の私営京都バスが運行

⁴ 京都府 京都府の温泉 府内温泉一覧（平成 22 年 12 月現在）

ケア体制の整備を求める声が多いことが今回の聞き取り調査で分かってきた⁵。昭和初期のようなにぎやかな集落像ではなく、交通や購買環境の改善など「安全で、安心して静かに暮らせる」地域づくりを住民は希望している。集落再生を「観光振興」という経済的な活性化ではない、余生を静かに暮らしたいと願う町内住民の意識が明らかになってきた。だが反面、現状のままでは集落が消滅する危機感もあり、相反する心情が内在している所に同地の複雑さがある。その意識は、現在も景勝地として多くの観光客やハイカーが訪れているにもかかわらず、多くの民家は来訪者と関わりを持つことを拒んでいるかの様に扉を閉め、交流しているような姿もあまり見かけない。茶店も休日以外は店を閉める日が多く、営業している様子がわかりにくい。その雰囲気は来訪者も感じているようで「なにもない所」として弁当持参者が多く、または嵯峨嵐山まで戻り、食事をするという悪循環を生んでいる。

地域というのは、そこに暮らす者の思いが一番に優先される必要があるという考えに立てば「観光地でなくていい」という住民の意識は尊重されなくてはならず、それもひとつの住民の選択であろう。しかし、時代はその住民の思いとは関係ないところで新たな展開を見せて始めているだ。

平成 22 年の夏、投資効果が見込めないという視点から空き地となっていた旧旅館跡地や廃旅館などが軒並み、正体不明の海外資本に売却されるという事態が発生した⁶。国際化の波が突然、この高齢化する静かな小集落に押し寄せたのだ。現在まで目に見える動きはないものの、購入者の姿や意図が全く見えないことで、住民の間では不安が広がっている。今後、海外観光客を見込んだ海外資本の進出により、同地の姿が大きく変わる可能性も否定できない。

1.3 歴史的にみた清滝の変遷

(1) 清滝の地名の由来

清滝という地名は「唐の長安に留学した空海が中国の青竜権現を歓請され、高雄山寺（神護寺）の領主としてここに祀られた。青竜権現がはるばる海を渡って来られたから、日本ではそれに水編（みづへん）を加えた文字に改めて『青竜』を『清滝』にし、それに因んで川も『清滝川』と改名した⁷と周山街道の御経坂にある清滝大明神の案内記にある。

(2) 平安時代の愛宕山開山から

大宝年間、行者や泰澄により愛宕山が修験道の霊山として開山され、修験道の修行場として、僧や奉仕者など関連する人種のみが住み着いた信仰の地であった。

(3) 江戸時代の清滝

清滝集落の原型が形成されたのは江戸時代といわれる。太平の江戸時代に入り、世の中が落ち着きだすと、日本の国土に、諸国間をつなぐ主要街道が整備され、物や人の流通が活発化していく。この街道整備によって、庶民の間に広



写真 2 清滝川沿いには旅館や茶店が軒を連ねた

⁵ 21 件中 11 件で聞き取りを実施

⁶ イギリス領バージニア諸島の私書箱に所有権（法務局不動産登記から）

⁷ 京都の地名を歩く（吉田金彦著 京都新聞出版センター発行）

まった聖地巡礼の旅「遊山」が流行し始める。愛宕信仰も愛宕聖と言われる修行僧により、日本諸国の村々に伝えられ、各地の村人集団で組織する信者組織「講」が生まれる⁸。講からは代参者が京都の愛宕山まで月詣りや年詣りをする習慣が生まれた。このころでは「伊勢に七度、熊野に三度、愛宕さんには月参り」という歌が流行するほど愛宕山信仰は隆盛する。講の代参者を対象に、宿泊所や休憩所となる旅館や茶店を提供するため、他所の者たちが参道沿いの清滝集落に住み着き現在の集落の原型がうまれる。移住した住民は、観光業だけでは生計が厳しく、周辺の山地を分け合って山を所有管理し、林業を営んでいた。旅館業や茶店は主に女性が賄う仕事となり、男性は林業や山の物産収穫に従事し家計を支える生活様式が定着していく。

(4) 昭和初期～清滝がもっと栄えた頃 愛宕山電鉄とケーブルカー～

大正期に嵯峨地域にも鉄道誘致への要望が起こり、昭和2年に地元資本と京阪電鉄と京都電燈会社が出資して「愛宕山鉄道株式会社」が設立された。昭和4年4月に京都電燈配下の嵐山電車・嵐山駅と清滝を結ぶ平坦線が、また同年7月には清滝から愛宕山山頂（7合目）を結ぶ鋼索線が開通した。これは清滝住民の足となる交通機関というより、主に愛宕参詣客を見込む観光鉄道として整備されたものだが、集落にとっては、鉄道会社の社宅や関係者が転居して人口増加に寄与した。この鉄道開通により、愛宕山自体もその風景を大きく変える。終点のケーブル愛宕駅周辺には洋式の愛宕ホテルや愛宕遊園地、スキー場などの施設が建設整備され、参詣者の信仰に基づく観光から、信仰とは無縁の一般者も対象とした大衆観光地と開発され、四季を問わず大勢の観光客でにぎわいを見せ、愛宕山は信仰の山から最先端のレジャー地へと一変する。鉄道開通により、愛宕山登山道の途中にあった茶店は、ケーブル敷設により山頂部参道から川の畔の平野部に補償移転した。また一部の店は閉店した。また、愛宕山の中腹部にあった嵯峨小学校・清滝分教場も閉校され、釈迦堂横の嵯峨小学校に統廃合された。山麓の集落清滝にも平坦線の清滝駅とケーブル鋼索線の清滝川駅が建設され、また川左岸沿いの平坦地には清滝遊園地が整備されるなど、大勢の人出でにぎわい、集落有史以来の隆盛を誇った。

(5) 戦後の清滝～衰退のはじまり～

戦後、清滝もいち早く、観光地として機能を回復するべく動きだした。愛宕鉄道やケーブルの復活も持ち上がったが、もともと、採算ベースの低い鉄道であり、新たに再敷設する価値を見いだせないことで結局、愛宕山鉄道会社は解散、廃路だけを残し、その後も復活はされることはない。昭和46年に清滝の再生をにらみ、ケーブルやロープウェイの設置計画も持ち上がったが、風致景観の問題により頓挫した経緯がある。

高度成長時代へと移り変わり、勤労世代や若年層を中心に人口流失は起こっていたものの、まだ当時では3軒の旅館と8軒の茶店が営業を続け、観光客を受け入れていたが、モータリゼーションの発展による日帰りレジャーや海外旅行の増加、温泉ブームなどの観光スタイルの多様化に加え、基となる愛宕山信仰参詣登山者の減少により清滝の観光地機能は徐々に低下していく。その動きに歯止めをかけようと、昭和40～55年代、清滝に新たな観光施設が整備された。愛宕山15丁目の参道脇に広がる、平坦部の地形を利用してフィールドアスレチック場が開業した。また清滝の歴史や民俗、古道具などを展示する清滝民芸館や映画関係施設⁹が清滝川沿いに整備された。開設当初は話題性もあり再

⁸ 愛宕講関西圏を中心に江戸時代に広まった集落単位の信仰組織 代表者が団参する

⁹ 昭和58年に俳優の千葉真一が養成所施設としてJAC・千葉道場を開設、俳優真田広之や志保美悦子、伊原剛志、堤真一などが通う。レッスン待ちの若者たちが清滝川で泳ぐ姿がよく見られた。この頃、日本シリーズで優勝した阪神タ

興の兆しが見えたものの、バブル経済の崩壊により主体企業が倒産し、これら施設は閉鎖撤退となり観光地清滝は戦後最大の打撃を受ける。この頃から旅館業や茶店経営者の高齢化や後継者不足も表れ出し、次々と旅館や茶店の閉店撤退が続き、集落は観光地としての経済基盤を著しく喪失させ、江戸時代から続いた宿場まちは静かな居住地へと姿を変えていく。平成 24 年現在の清滝は旅館として「ますや旅館」が一軒、茶店は「なかや」「一文字屋」「智楽庵」の三軒と平成 22 年に転入してきた「ギャラリーTerra」一軒の計五軒を残すのみとなり、その殆ど店が休日のみの臨時営業的なスタイルとなっている（図 3）。

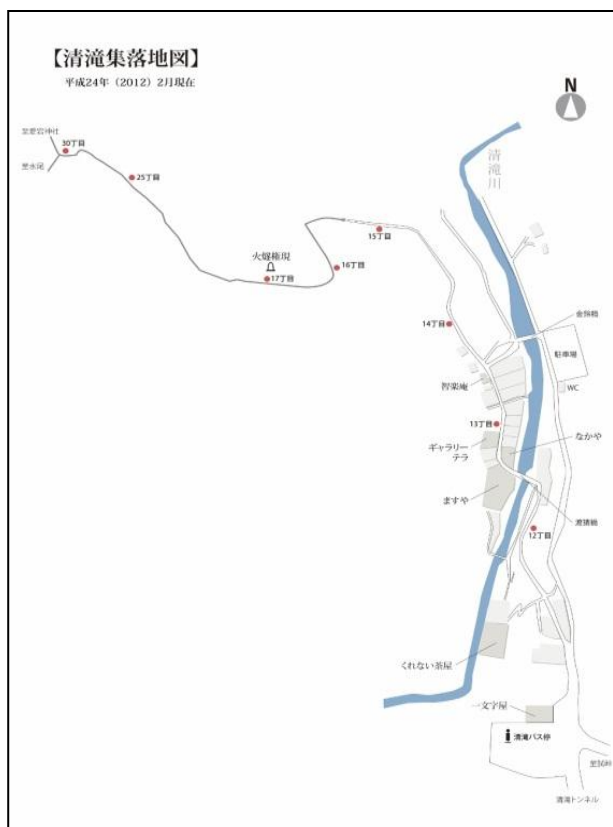


図 3 平成 24 年現在の清滝集落の商業施設図

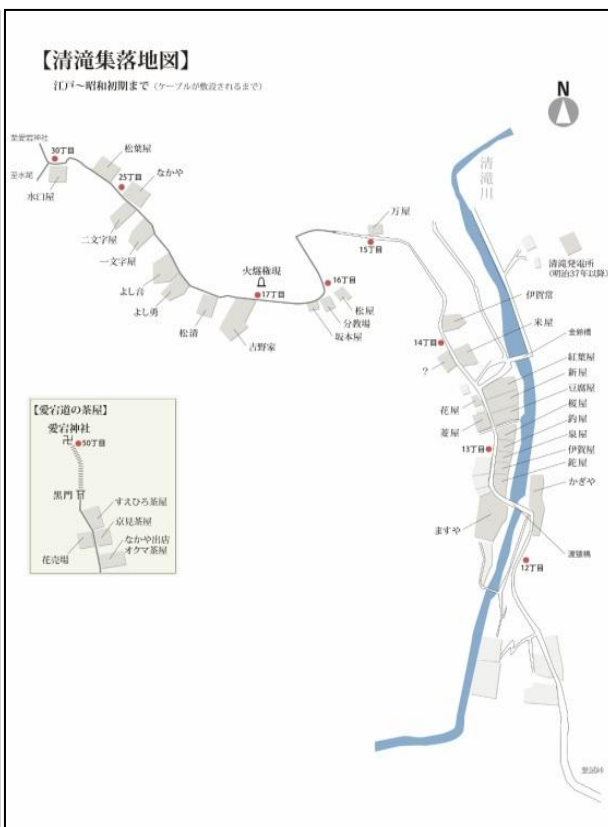


図 4 江戸末期から昭和初期の清滝集落の商業施設図

1.4 宿場まちの移り変わり～江戸時代から昭和、そして現在～

清滝を観光集落地として形成してきた旅館や茶店は時代とともにどのように変遷していったのだろうか。聞き取り調査（ますや森田氏）と資料¹⁰を基に比較分布図を作成した。図 4 は、明治時代から昭和 4 年の愛宕山鉄道が敷設されるまでの参道沿いに点在した旅館と茶店の屋号を調べたものだ。愛宕山頂までのケーブルが敷設されたことで、山中の参道を歩く人が少なくなり、山中の殆どの店が清滝川沿いの平坦部に移転、もしくは鉄道移転会社からの補償により廃業した。

戦後を境に、当時 31 軒あった旅館や茶店も、現在では図 3 のように、その殆どが閉店し民家に用途変更し、また、愛宕山中の参道には民家すら姿を消している。この図の比較をみても、現在の集落には茶店が殆どなく観光地としての機能は著しく低下していることがわかる。

イガースがキャンプ場に使用した。

2. 清滝集落の潜在力の視点～清滝を支えた3つの道～

第一章で記した集落の歴史変遷の調査を基に、その歴史や住民の暮らしの文化の記録を、地域の特徴として「潜在力」に転化することで、再生の糸口になると考えていた私は、さらに詳しく地元の方々に聞き取り調査を実施し、その上で見えてきたキーワードとして、集落を支えてきた「3つの道」に注目した。清滝の地理的特徴は、農耕地を持たない山峡の小集落であるということ。愛宕山信仰が流行する江戸初期までは、住む者も少ない修行場だったと考えると、同地を形成し、支えていたのは「参詣の道」「清滝川の道」「山の道」の3つの道だ。これらの道を通じて清滝は他所とつながることで、食と経済を確保し、生活の基盤を構築することで集落を維持してきた。この「3つの道」を再生のキーワードに位置づけ、地域資源を発掘し観光プランを作成できないか、まずその視点から聞き取り調査を試みた。

聞き取り証言者・・・森田雅雄氏 旅館ますやの店主
豊田ふみ氏 元旅館かぎやの女将
西野 伸氏 清滝自治会会長
秋山夙子氏 くれない茶屋店主

2.1 愛宕山信仰「参詣の道」

清滝集落の生成と愛宕山の関係は深い。「愛宕信仰が生まれなければ清滝集落は生まれなかっただろう」というのは清滝住民の共通の認識である。その集落形成の原点である愛宕山山頂の神社へと続く道「参詣の道」の価値を検証した。

(1) 愛宕山信仰とは 祈りの里へ

京都盆地の西北部に位置し、海拔 924mの標高は京都市内で一番高い。山頂は京都市右京区に位置するが約 1.5km西に境界があり、山体は亀岡市にまたがっている。江戸時代、庶民の間で「お伊勢七度、熊野へ三度、愛宕さんへは月詣り」と詠われ、「火伏せの神さま」として信仰を集める。京都では天台密教の聖地・東の比叡山に対し、西の愛宕山は「火を司る神」＝「火の用心」＝「火伏せの神様」を祀る神山として畏敬されている。

愛宕山の由来が詳しく記述されている「愛宕山神道縁起」や「山城名勝志」によると大宝年間（701～704年）に修験道の祖・役行者と白山の開祖・泰澄（雲遍上人）が山岳信仰の修業場とて開山したといわれ、山頂に鎮座する愛宕神社は奈良時代の天応元年（781年）に和気清麻呂と慶俊僧都が京の都建設にあたり御所の西北、乾の方角の守護（王城鎮護）のために祀ったことに起こる。平安時代には山岳仏教隆盛に目をつけた仏教徒が、唐の五台山にならい「白雲寺」を建立し、神仏習合を遂げる。山は愛宕修験の修業場でもあり「愛宕聖」とか「清滝川聖」と呼ばれた修行者が山中や麓に住み着き、愛宕信仰を日本全国に布教し広めた。愛宕修験勢力は、南北朝時代の動乱期に体制転覆を図る一大勢力となったり、本地仏が勝軍地藏であることで戦国時代には武家の信仰も集め、豊臣秀吉や徳川家康からも帰依した。また、明智光秀が愛宕参詣の際に詠んだ歌「ときは今 雨（天下）が下しる 五月かな」は有名である。日本史の転換期や分岐点に登場する山である。その後、明治政府の廃仏毀釈で白雲寺の坊が廃され現在の愛宕神社のみとなる。西野氏は「お山の信仰で生まれた里が何より、清滝の

10 愛宕山と愛宕詣り（八木透・監修鶴飼均・編 佛教大学宗教文化情報研究所）P 88

特徴である」という。街道開通と講団参者の往来により生まれた清滝。誕生の基となった愛宕信仰の再興が、清滝の固有性を見直す鍵になる可能性は大きい。

(2) 参道の旅館と茶店

聞き取り証言者・・・森田雅雄氏 旅館ますやの店主

江戸時代初期より「ますや」と「かぎや」の二軒の茶店兼宿屋が営業していた。正式に旅館業を始めた明治時代頃から、文人墨客が来客として訪れ、数々のエピソードを残している。このエピソードは旅館や茶店をして暮らす住民の生きてきた記録とともに、文学の香り漂う物語として現在も語り継がれ、清滝の風情を際立させている。

その中のいくつかを挙げてみたい。

① 徳富蘆花の癒しと読書にふけた宿

1888年（明治）当時同志社英学校の学生であった徳富蘆花（20歳）は創設者の身内の者に初恋をし、周囲からの強い反対により失恋する。その心の傷を癒す為に清滝を訪れ、ますやに20日あまり滞在した。この時の模様や自身の心情を「黒い眼と茶色い眼」（大正3年12月刊）という作品に実名のまま掲載している。ますや旅館の玄関前でもある清滝川渡猿橋右岸袂には「自然と人生」という徳富蘆花ゆかりの石碑（昭和37年・徳富蘆花顕彰会が建立）が建立されており、日本初の自然派作家誕生の出発点となった場所として記されている。ちなみに当時、蘆花が読書に耽った部屋は今もますやに現存している。

② 与謝野晶子・鉄幹の歌会

昭和5年に夫・鉄幹とその弟子たちとともに、ますやに宿泊し歌会を開催している。自身の詩集・「みだれ髪」で清滝を詠った短歌を掲載している。この歌は、それより以前に母に連れられ訪れた清滝の自然と思い出を詠ったものといわれている。清滝川渡猿橋所上流の左岸にこの歌を刻んだ石碑（平成16年建立）が建ち、清滝のモニュメントとなっている。

③ 第三高等学校の学生たち

明治から昭和初期には第三高等学校（三高）¹¹の学生達が「清遊」と称して清滝に足繁く通い、ますやを常宿として遊学に興じ、青春を謳歌した。

その中には、後に文士・作家で名を馳せる梶井基次郎や田宮虎彦、織田作之助、三好達治、荒木文雄などがいた。また、政治家では濱口雄幸に幣原喜重郎、片山哲といった歴代総理大臣経験者や湯川秀樹や朝永振一郎、江崎玲於奈といった後にノーベル賞を受賞する学者たちも若き日に足繁く通い、議論を戦わせ、酒を呑み交わし、青春を謳歌した宿である。

④ 茶店の暮らし

参詣者の足休めの休憩処として各店ともに繁盛した。茶店の仕事は主に家族の女性がきりもりした。お店の前には茶店の女中たちが立ち「どうそ～いっぷく お休みやす～」と呼び込みをする風景が日常的にあった。茶店で出されるメニューは煎茶と清滝名物といわれた菓子「しんこ」酒類が主で、中には清滝川で獲れた川魚の天ぷらなどを出す店もあった。

煎茶は各店が自前で生産していた。山のわずかの平坦部や緩やかな傾斜地を利用して茶畑を作っていた。参詣者の往来や茶店の数から考えても、かなりの生産量があったものと思われる。茶を製茶する仕事場である「ほいろ小屋」があり、お茶職人が数人いた。

¹¹ 京都大学の前身。1894年に第三高等中学を母体にして発足。

清滝住民や旧住民の間では、今でもお互いを「苗字」で呼ぶより「屋号」で呼び合うことが多く、宿場町のなごりを今も残している。

⑤ 愛宕名物「しんこ」菓子

証言者・・・豊田ふみ 旅館かぎや（廃業）元女将

「清滝しんこ」は愛宕詣りのお土産ものとして有名だった。お伊勢詣りの赤福のようなものと考えるとわかりやすい。米粉の団子で、砂糖と塩を加え、熱いお湯でこねて蒸し菓子にする。味は米粉風味、ニッキ、抹茶の3種類で、長細く伸ばし、ねじりを加えるのが特徴だ。このねじりは愛宕山の参道が曲がりくねっていることを表しており、ねじり方にお店の個性がでていた。しんこは、今も嵯峨の茶店で出されている¹²が、ねじりが少なく、清滝型とは少し異なる。「清滝しんこは曲り具合が多いのが一番の特長で、今では、伝統の作り方を継承しているのは私ぐらい。」と豊田ふみ氏は語る。清滝しんこの製造技術の唯一の継承者である豊田ふみ氏には、今春にも製造方法の記録化に協力してもらい「清滝しんこ講習会」を開催する予定だ。

⑥ 清滝硯

証言者・・・清滝硯の復元者故山本修三氏・妻

愛宕山からは硯・砥石の素材となる石材が産出された。地質は保津峡にもよく見られる石英質の珪石で、この岩片を採取して錬磨加工すると硯や砥石になる。清滝を訪れた客のお土産ものとして、砥石や人形型硯などが茶店の店頭で販売され人気があった。歴史は古く平安時代の史料に「清滝石」や「さか石」として紹介され、特に刀などの刃物を研ぐのに重宝された。室町時代ごろから愛宕詣りのお土産となり、嵯峨地域では最古のお土産ものとして全国へ持ち帰られた。また、明治初期に京都の伝統産業として伝統の技法を伝承された職人が嵯峨周辺に住み、全国各地や中国まで盛んに出荷していたが、今では技術を有する職人は皆無で、伝承が途切れたことは惜しまれる。

⑦ 参道の茶店と山頂

愛宕山山頂へと続く山中の参道にも茶店は点在していた。しかし、昭和4年に愛宕山ケーブルカーが敷設されると、ほとんどの参詣者がケーブルカーを利用することから、愛宕山鉄道株式会社の補償という形で、これらの山中の茶店は山麓の清滝集落へと下山し、茶店を再開する。

2.2 「川の道」としての清滝川

清滝川は、京都市北西部を南流する川で、京都市右京区京北町の飯森山を水源として、愛宕山東麓を南に縫いながら保津川へ注ぐ。延長21kmで流域面積68.8km²である。清滝川は源流近くの大森付近を除いて、盆地らしいところを流れることがなく、上流部には北山杉の産地・中川があり、中流域の高雄・槇尾、梅尾の三尾の峰は紅葉の名所として有名で、世界文化遺産にも登録されている高山寺や空海上人ゆかりの高雄神護寺がある。川自体が平安時代から修験道の行者が「俗から聖へ」身を清める結界地水垢離場でもあり、どこか神秘的な秘境の風情がある川である。古くは松尾芭蕉が訪れ歌を詠み¹³、川端康成の「古都」をはじめ徳富蘆花の「黒い眼と茶色の目」や与謝野晶子の歌集「みだれ髪」などの著書に紹介された。これら文人墨客はその清らかな流れと川沿いの風情をこよなく愛したという。清滝の自然を象徴する川である一方、保津川と同様、筏流しが盛んに行なわれた産業水路でもあった。平安時代の歌人・俊恵法師や鎌倉時代の天皇・後嵯峨院の歌に、清滝川を流す筏や筏士

¹² 嵯峨鳥居本の「愛宕神社一の鳥居」前の茶店平野屋やつたやで今も出されている。

のことが詠われている。上流の小野郷や中川から相当量の材木が清滝川を筏または丸太で流す「一本流し」で移出され、清滝集落付近から筏に組まれ、保津川を経て下嵯峨の材木屋へ搬入されていた。

(1) 清滝川の水運の歴史

① 清滝川の筏流し

清滝川では本流の保津川と同様、筏流しが盛んに行なわれたが、本流の保津川に比べて水運の歴史資料や記述、写真等が皆無に近い状態で、これまで具体的に調査研究された痕跡がない。辛うじて平安時代の歌人・俊恵法師や鎌倉時代の天皇・後嵯峨院の歌に清滝川の筏並びに筏士のことが詠われているだけだ。

聞き取り証言者・・・渡邊幸男氏（95）元清滝川の筏士

妹尾吉隆氏（90）精進料理・阿じろ会長 元清滝住民

出口すみえ氏（92）元高雄（小泉山）住民 茶店経営者の子

豊田善穂氏（80）元清滝住民 清滝川の筏士の子

渡邊氏の証言によると、清滝川上流の集落である小野郷や中川から相当量の材木が筏により流されていたという。最も盛んだったのは明治初期から昭和 23 年頃まで、流した時期は春先と晩秋から冬の年 2 シーズンの仕事であった。上流部の狭い川幅の所は材木を一本ずつ流す「一本流し」で移出される場合もあったが、効率の上から殆どの材木は愛宕山系から、キンマにより搬出され清滝集落の川岸で組まれ、筏にして、支流から本流の保津川を経て、下嵯峨の材木屋へ搬入されていた。清滝川は筏流しに



写真 3 清滝川の筏（昭和 10 年頃渡邊幸男氏 所有）

必要な常水量が安定しないことから「仕留め」という人工堰を造り、筏流し可能な水量を溜めた後、堰を切ることで生まれる豊富で勢いのある川水に乗せて流す操縦法が特長だ。この堰が切られて流れ出す川水のことを筏士用語で「一時水」と呼んだ。筏の規模は 12 連から 13 連の保津川同様の本格的な筏で、一枚目をハナ、二枚目をワキ、12 連目をサロサキ、13 連の最後をサロと呼んだ。この 12~13 連の筏を 5 人の筏士で操縦したという。これは清滝川の流路が湾曲で狭いことから、岩や浅瀬に引っ掛からないように操作する筏士が等間隔で必要となり、小回りのいい操縦を確保するためにはこれだけの人数を必要とした。保津川に合流すると川も広く、流れも安定するので筏士は 5 人も必要なくなるため、2 人は清滝川・保津川合流点で飛び降り、保津川から係留場となる嵐山までは 3 人で流した。飛び降りる時は筏を河原に乗り上げブレーキをかけ減速したところで降りる。降りた筏士は川沿いの道を徒歩で清滝集落まで帰った。降りる筏士は年配者が多かったという。

川の水を堰止め、筏が流れるのに必要な水量を溜める人工堰「仕留め」は、清滝川に架かる金鈴橋上流に設置されていた。当時の清滝集落の写真の中にも、その姿が写っている。昭和初期頃には兩岸

¹³ 芭蕉は「清滝や 波に散り込む 青松葉」「清滝や 神は雪解ぞ 京の水」と二作品を残している。

の川べりから筏が通過する堰「水戸」までの間が栗石を詰めたコンクリート張りで整備され、水戸のみが杉板で封鎖されていた。渡辺氏と豊田氏の両名の聞き取り調査を基に清滝川仕留めの構造を図にすることができた。

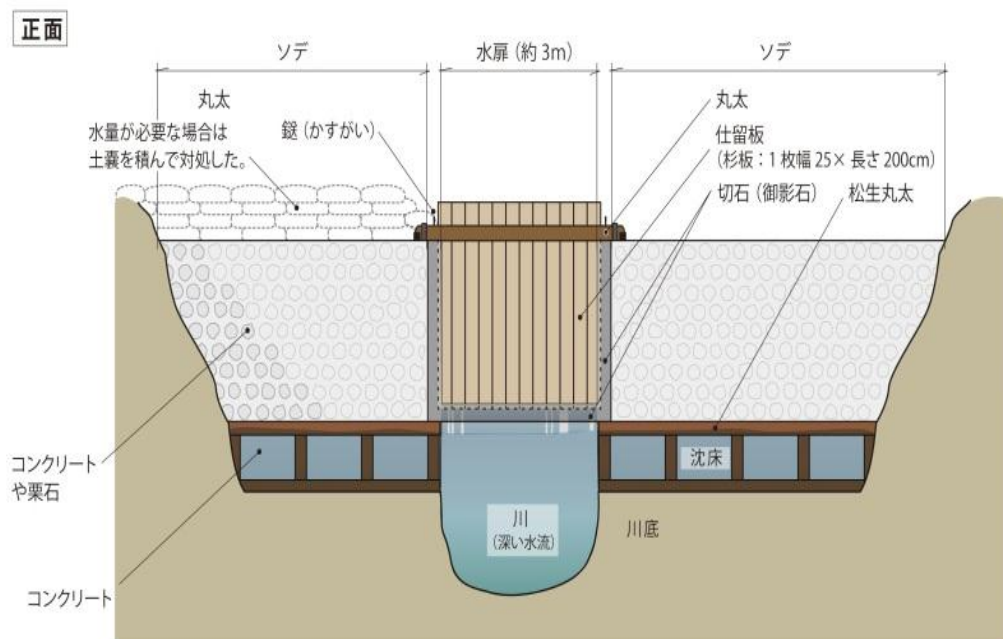


図 5 清滝川筏流し用仕留め 正面図

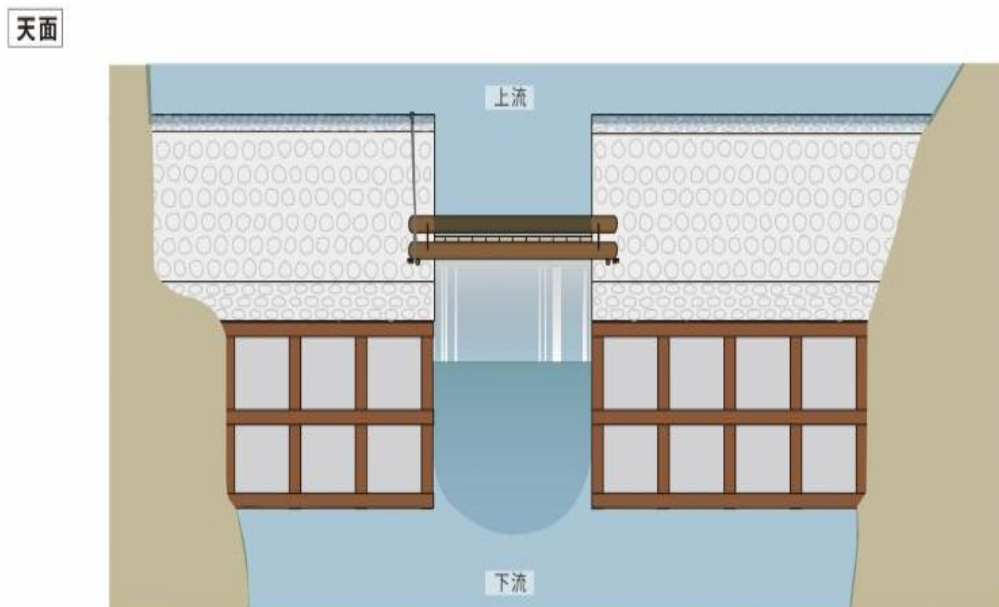


図 6 清滝川筏流し用仕留め図 天図

仕留めは、両岸から栗石詰めコンクリートの壁で、筏の流出口となる水戸を挟んでおり、水戸との接続部分には「切石（御影石）」を埋め込んで滞り止めし、水漏れしない工夫が施されていた。水戸は約 3m 幅で、仕留め板（杉板）は丸太（杉）二本の間に差し込み水圧で押されて立てかけられた。板底

は、川底に敷かれてある切石に約 5cm の切り込みが造られてあり、板の流出を防ぐための板掛けとして安定させられた。水戸の構造は、仕留め板が一枚幅 25cm×縦 20cm の杉板で、重ならないように並列で差し込んだ。少しの隙間ができると芝や小石を詰め塞ぐこともあった。二本の丸太が板にかかる水圧に押されないために、前方の丸太の両端を止める金具が設置されていたが、それだけで丸太の安定を確保するのは難しく、二本の丸太をワイヤーロープで括り仕留めの裏に設置されたフックに引っ掛けて引っ張っていた。水戸の板を抜く時は、丸太の上に二人の人間がまたぎながら、両側に分かれ一枚一枚抜いていく。まず、板を軽く引き上げ、底の板掛けから外し、板底を押す水圧を逃がす為に川の上流側へ板を倒しながら抜いていく。その抜き手も筏士がおこない、水戸を通過していく筏へ飛び乗り操縦に加わる。

豊田氏によると「清滝の仕留めは当時の子どものいい遊び場だった」といい、筏流しに使用する水を溜めない時は、水戸下流の深く掘り込まれた水たまりなどに飛び込むなど集落の子どもたちの川遊びには絶好の場所だったという。この証言でもわかるように、清滝川の人工堰は、大堰川の人工堰のような取り外し型の木造堰ではなく、常時設置型であった。水戸の丸太や仕留め板などは、筏を流し終わった後、使用した筏グループが撤収した。そして、また筏流しの依頼があれば、請け負ったグループが水戸部分の板や丸太を設置し、水を溜めることが許されるというルールがあったのだという。

清滝川を筏が流れていく風景を目撃したという妹尾氏は「当時、筏士はカッコいい仕事で、旅館や茶店に務める女中の注目の的で、手を振られたり、声援を受けたりと人気があった」といい、若い筏士は集落の女性たちの憧れの存在だったという。

実際に若い頃、清滝で筏に乗せてもらった経験のある出口氏は「筏士さんは、わざと筏を上下や左右に揺すって怖がらせてくれました」と地域の若い女性や子供などを筏に乗せて遊ぶ、という茶目っ気のある筏士もいたようで、集落の産業として住民たちに溶け込んでいたことがうかがえる。

今後は仕留めが川中の構造物ということなら、公共施策で設置されたものである可能性が高いので、府の土木資料などにその記録がないかを当たり、さらに明確にしていきたい。

② 清滝の舟運——観光船が流れた風景

聞き取り証言者・・・豊田善穂氏（80）元清滝住民・清滝川筏士の子

早田昭夫（85）嵐山住民・元嵐山通船の船士

清滝川の舟運については、川幅の狭さや流路の複雑さ、また水量の不安定さなどを根拠に、これまでその存在自体が否定されていた。しかし、旧住民の豊田善穂氏ただ一人が、集落の長老数名から聞いた話として「清滝舟運」の存在について証言をしていた。豊田氏の証言によると、昭和 25 年に町内会で行った「道づくり」¹⁴の作業中に、実際に舟を操船したという長老から話を聞いたのだという。その長老は「大堰川（保津川）では『保津のおと

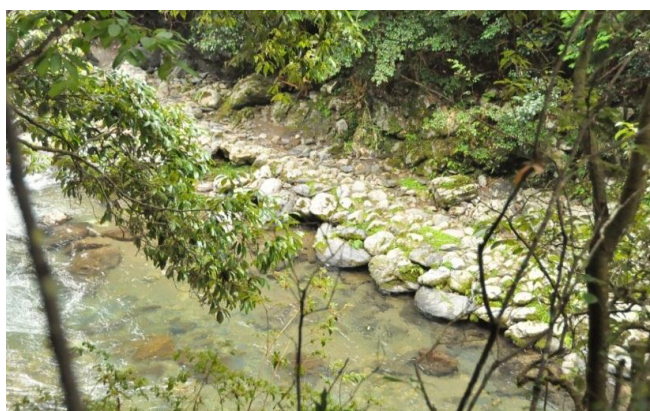


写真 4 清滝川に現存する川作の跡 石積み

¹⁴ 7 月 31 日から 8 月 1 日の明朝まで行われ愛宕千日詣の参道整備。清滝住民が毎年、奉仕で行っていた。

舟、清滝のやんちゃ舟といって、清滝の舟は迫力が違う！』といわれているや！」と話し、清滝の舟下りは今の保津川下りと比べても負けない迫力があることを力説していたという。また、旅館の仲居をしていた大叔母からは「清滝ますや旅館の下から舟が出るというので、お座敷のお客さんの好意で何度も一緒に乗せてもらった」「最高の落差がある『石のどんどん』を下る時は、舟が滝を落ちる様な迫力で、川の水しぶきが高く上がり、服がびしょ濡れになった！」という具体的な乗船の体験も聞いている。さらに、豊田氏は父から明治後期にあった清滝川下りの計画についても聞いている¹⁵。その証言によると「明治後期に高雄から観光船を流す計画があり、清滝川で大掛かりな川作工事がなされた」というのだ。しかし、同時期に清滝川に水力発電所計画が持ち上がり、高雄から清滝集落間の川で水力発電用のダムが造られ、計画は頓挫したという。だが、清滝では舟運計画は継続され、旅館がスポンサーになり自前で舟を造船し、明治後期から大正にかけて舟下りを始めていたという。豊田氏は「実際に私が住んでいた泉屋下の清滝川には松の胴木が設置されていた。この胴木は昭和50年代まで腐らず残っていた」という。さらに豊田氏の叔父にあたる旧住民豊田三郎氏によると「かぎや別館の木橋下流に『仕留め』が作られてあり、舟が二艘繋いであった」という目撃証言も得ることができた。豊田氏の大叔母の豊田いしさんが舟下りをしたのもこの時期だという。

私は保津川の船士として日々、川に舟を流し、また川に丸太を敷き岩や川底を開削する工事・川作をする者だ。その視点から見ても、これらの証言どおり、川に工事を施せば舟の運行は十分に可能だと確信するものだ。この証言には信憑性を感じた。実際にこの証言に基づき、夏期を中心にその痕跡を求めて何度も川岸を歩き、時には川中に潜りながら痕跡を探す現地調査をした結果、その遺構と考える割り石や石積みを多数確認している。

③ 清滝舟運の写真の発見

しかし、証言と物的な遺構だけでは舟運が存在したという十分な証明にはならない。しかも「清滝川舟運の運行」についての文献や資料は皆無なうえ、住民の中にも目撃者はなく、証明作業は難航した。手がかりが証言以外得られない中、暗礁に乗りあげていた。そんな時、清滝川に舟が流れている風景を撮った貴重な写真5が発見される。この写真5は京都愛宕研究会の鶴飼均氏が所有していたもので、私の舟運調査の話を聞き、大量に保管されている古い絵葉書の中から見つけ出して下さったのだ。昭和初期頃の「愛宕清滝観光用絵葉書」の中に収めてあった。

ここの写真5の出現により、清滝川舟運の存在の可能性が一気に進展した。写真に写っている橋や旅館、茶店の様子から撮影され時期を割り出し、清滝での聞き取り調査や目撃者捜しを続行した。写真は清滝集落にかかる渡猿橋の下を、舟が下っていく風景だ。清滝の古老・森田雅雄氏や旧住民豊田善徳氏からの聞き取り調査から、ここに写っている船頭は彼らのよく知る清滝の住人であり、その氏名まで判明した。

写真の舟は、当時の保津川下りと同系の



写真5 清滝川舟運の風景写真（絵葉書）

¹⁵ 明治時代、高雄で旅館や茶店などの客を見込んだ川下り計画があった。当時はまだ国道162号線・周山街道は整備されておらず、観光客が川舟を利用する周遊ルートを探索していた。

高瀬船で、木造船だ。操船には、岩や岸が迫る狭窄な川の形状からか、櫂は使用せず、舟の前方で二人が竿を差している。おそらく櫂は川幅が広がる本流・保津川に出るまで使用しなかったのだろう。櫂を担当する者まで竿を差している写真からは、舟の舳先を瞬時に小回りさせられる、高度な操船技術が必要であったことがうかがえる。

さらにこの写真を持って、下流部で遊覧船会社を運行する嵐山通船の古い船頭を訪ねて歩いた。すると、その中に以前、保津峡・落合から観光舟運事業「嵐峡下り」に従事したという船頭経験者から、清滝川舟運の話聞くことができた。その船頭・早田昭夫氏によると「愛宕山鉄道が敷設された昭和4年頃、清滝の観光客増加を見込み、一時期、舟を清滝から出していた。舟は嵐山から保津川、支流の清滝川を上り、渡猿橋付近の清滝集落まで曳あげた。そこを起点に舟を流す事業をしていた。名前は『嵐峡下りの延長・清滝川下り（金鈴峡下り）』といい、先輩の鶴原某が経験した。」と話し、続けて「その先輩は『お前、清滝川の曳き上げ作業は恐ろしくしんどい作業やったわ！』と実感を含めて話してくれた」と具体的な操船体験の様子も教えてくれたという。経営の主体は嵐山の嵐峡下りの様で、きつい曳あげ作業を伴ったので、舟を流した経験のある清滝住民に船頭を依頼することがあった様だ。先の豊田氏の証言はその依頼を受けた清滝住民の体験談を聞いたものと思われる。

操船方法は筏に使用する人工堰の仕留めの水を利用して水量の調整をした。しかし、舟は仕留めを抜いた水より早く流れていくため、「水待ち」という作業が必要だった。「水待ち」とは仕留めから抜いた水より舟が速く流れるために、途中で水量不足になり、水が到達するのを待って水嵩が増えた時点で再び運行を開始する作業のことをいう。そのため、筏に使用する仕留めだけで水量が十分に確保できない為、仕留めを二か所増設して対応したといわれている。その仕留めの場所は、渡猿橋下流に一か所、保津川合流点との中間地点である明神谷川の下流に一か所、作られた跡が残っている。また、航路となる川幅を狭め絞り込み水嵩を上げる石積み跡も現存している。また、豊田氏は「常水以上の水位があると保津川との合流地点（落合）に大きな渦ができ、舟が渦に巻かれぐるぐる回った」という、舟を流した体験者にしかわからない具体的な操船体験話も聞いている。

運行期間については写真の渡猿橋が昭和11年に洪水で消失していることから、昭和4年の愛宕山鉄道開通時から昭和11年までは存在していたことがわかる。その後いつ撤退したのか詳しい時期については目下調査中であるが、これらの証言や写真の存在により、清滝川舟運が昭和初期の数年間、存在していたことが今回の調査で明らかになったといっていだろう。このことは保津川水運の歴史にとっても貴重な事実であるとともに、清滝集落住民と川の関わりを知る上でも重要な資料となり、なにより再生への潜在力になりうると思う。清滝川舟運については今後もさらに明確にするための調査を継続中である。

(2) 清滝川の自然といきもの

①□空也の滝

清滝から月輪寺に登る参道の左側、清滝川の支流・堂尻川上流の滝である。高さ12m、幅1mの京都一の落差を有する。今から千年以上前に、空也上人の修行場だった。木々の陰が暗く、冷たい空気が流れる真夏でも寒さを感じる地である。今も修行者が滝浴びをする姿がみられる京都最大のパワースポットといえる。

② 清滝ゲンジボタル

昭和54年（1979）に「清滝川のゲンジボタルおよびその生息地」として国の天然記念物に指定される。調査研究は京都大学理学部動物学教室 森下正明教授により昭和50年から実施された。

作家・瀬戸内寂聴の小説「いよいよ華やぐ」日経新聞社（1998）に紹介された。清滝の蛍の乱舞は有名で関西随一と呼ばれ、シーズンには多くの観察者が訪れる。はたるが飛ぶ時期は、自治会が駐車場の管理などを請け負い、来訪者の案内等も行っている。

③ 清滝川の生き物

オオサンショウウオ（昭和 27 年指定） カジカカエル、鮎、アマゴも放流している。

④ 渡猿橋

清滝川に架かる欄干がある赤色の橋で、清滝を象徴する橋である。もともと愛宕山の参道として架けられた橋で、長さ 20.6m、幅 3.5m である。文覚上人が、猿たちが手をつなぎながら川を渡る姿をみて名づけたといわれる。増水で何度も流失しており、現在の橋は昭和 13 年に架け替えられたものである。平成 17 年に 2 月に橋梁地覆と高欄改修済み、鉄筋コンクリートアーチ式橋である。

2.3 山の道、男たちが支えた山の仕事

女性が店を切り盛りする宿場まち清滝にあつて、男性の主な仕事は集落を囲む山地での山仕事だった。清滝では林業と呼べる大規模化した産業ではなく、個人または集落住民同士の小グループで、山主の依頼を受けて、周辺の山地で林業に従事した。また、山の間伐材などの焚き木収集も重要な仕事だった。特に「冬越し」と呼ばれる冬期の生活自給用エネルギーとして焚き木の確保は死活問題だった。焚き木は檜、ふくら（さやご）、そして芝などで、自己所有の山や管理委託された山で採取した。プロパンガスが設置されるまで、薪は市内でもよく売れたので、行商も行い、現金収入を得ていた。炭づくりも盛んで、愛宕山中には住民が作った炭焼き窯が点在していた。

(1) 製茶と茶畑

証言者・・・豊田三郎氏（94）旧清滝住民

旅館や茶店のお客に出すお茶は、すべて集落周辺の山を開墾した茶畑で採取されたものを使用した。その畑で摘まれたお茶葉っぱを蒸して「ほいろ」に乗せ炭火であぶり、手もみで製茶される。お店はすべて自家製のお茶を出していた。現在、清滝のほいろ作業を経験した唯一の人物、豊田氏に当時の様子を聞いた。「清滝の旅館、茶店で出されるお茶は全部、清滝産や。その製造作業場のことを『ほいろ小屋』と呼び、ますや、かぎや、伊賀屋、桜屋、菱谷がその小屋を持っていた。まあ、ほいろでお茶を触ったことがあるのは、清滝で私が最後くらいや。職人は他所から通ってきていた¹⁶。私はかぎやで、ほいろ作業を手伝った。職人から『ひっくり返しておけ』といわれた。クスノキの葉を入れて、匂いを入れる工夫もしていた。一人前のほいろ士は、揉みを手より足で踏んでやる。足の方が手より力があるから有効。しかし、難しい職人技のひとつだ。」と語る。

(2) 飢饉の体験を活かした戦中の暮らしと米買い道

愛宕参詣の宿場として旅館や茶店経営による観光で生きる集落には、天変地異などの大規模な自然災害はまさに死活問題だった。特に江戸時代の天保年間の大飢饉は集落の存続を脅かす事態となった。

聞き取り証言者・・・豊田善穂（80）元清滝住民・茶店和泉屋

「農耕地のない清滝は主食となる米が生産できないので、現金を持って隣村に米を買いに行っていた。この時、通っていた山道を「米買い道」と呼ぶ。山中の細い山道を歩き、水尾、越畑などの愛宕山麓

¹⁶ ほいろの職人は嵯峨や宇治からやってきて、期間中だけ滞在して作業に従事した。

の近隣集落や米の産地丹波地域まで買い出しに行っていた¹⁷。しかし、ひとたび、大飢饉が起こると参詣者はなく現金収入も途絶え、米を買うにもお金がないし、また持っていたとして近隣の村も不作やし売ってくれない」「そんな時『山に生える木々の根や葉っぱ、草など食べられるものは何でも食べて飢えを凌いだ』と話を祖父から聞いて覚えていた」という。その飢饉時の伝承が残っていたお蔭で「第二次大戦の時の食糧難を伝承同様の方法で飢えを凌ぎ、生き延びることができた」というのだ。大戦中も飢饉時同様、愛宕参詣は途絶え、旅館茶店は皆、開店休業状態だった。飢えを凌ぐ為、飢饉の時に同様の経験をした「先人の知恵」の伝承が生存するために役立ったというのだ。「特にクサ木の葉っぱは重宝した。まず、葉を採ってきて、ゆでる事でアクを抜く。その後、苦味を取る為、3日ほど谷水にさらした葉をメリケン粉などに混ぜ、団子風にして食べた。それにビョウブの葉や芽を採って来て、わずかな米と焚き、雑炊にして分けて合って飢えを凌いだ」と料理の仕方を語ってくれた。この伝承から、清滝のように農耕地を持たない観光を生活基盤とする集落は、外的状況の変化に極めて弱く、経済基盤としては何時も不安定で脆弱なものだという、現在にも通じる重要な視点を教えてくれている気がする。製造業の衰退により、新たな基幹産業として注目される観光業事業化による振興計画の危うさについても、示唆してくれているのではないだろうか。

① 追いやまと山の幸

集落には「追いやま」というイノシシ狩りのグループがあった¹⁸。イノシシは盛んで、今でも相当数のイノシシが捕獲されている。

マツタケも集落の貴重な現金収入源だった。昭和30年頃までは一日山に入ると背負い籠一杯のマツタケが採取できた。秋に採取したマツタケを嵯峨や京都の間屋に卸すと、茶店が閉店する冬期を十分に越せるほど、収入源になったという。「マツタケの時期になると集落の子どもたちは学校へは行かず、一日山へ入りマツタケ狩りに駆り出された。」マツタケが不作な年は「冬越え」が困難となるので、どの家も秋のマツタケ収穫には真剣だった。

清滝の住民にとって山は、火力、食糧、商い品の供給地であり、ほぼ自給自足の生存基盤において欠くことができない存在であり、そこに山への感謝や畏怖などの信仰心を涵養する源となっていたことがわかる。

3. 集落と人のつながりを物語で綴る～旧制第三高等学校の学生とますや～

清滝の聞き取り調査の中で唯一残る旅館・ますや店主との語らいほど、内容が興味深くて、物語性を強く感じるものはなかった。宿場まち清滝の歴史の生き字引のような旅館だ。

清遊の里物語・・・森田雅雄氏（86）ますや第十三代店主

京都に旧制第三高等学校が創設されて以来、学生たちは清遊という名のハイキングで清滝の地を訪れていた。その中でもますやの店主は商売の枠をこえて学生を可愛がり、豪遊ぶりを見守っていた。その当時のことを詳しく知る十三代店主・森田氏から三高の学生と先代店主・女将さんとのふれあいの物語を聞いた。

¹⁷ 米買い道は主に山中の参道にある茶店が通行した道と言われる。数ルートあったといわれ京都愛宕研究会でルート調査が実施されている。

¹⁸ 集落では山全般の仕事はグループ単位に従事していた。構成は家族または気の合う者同士で組織された。各家庭ではイノシシを追い回す猟犬を飼っていた。

愛宕山参詣の一般客に交じって、三高生が「旅館ますや」に訪れるようになったのは、三高が創設された明治時代からだという。最初は高雄から紅葉狩りのハイキングで清滝の地を訪れた。山紫水明の自然の風情を愛し、先代の店主森田清治夫妻の人柄に惹かれ、慕った彼らは高歯の下駄で吉田から4時間かけて徒歩でやって来た。清滝に近づくと、手持ち太鼓を叩きながら「ますや、ますや」と大声で叫びながら、店の者に訪れたことを教えるようにやって来たという。学生である彼らに「出世払いも当たり前」、帰りの運賃まで飲食費に使ってしまい、運賃を立替えることもしばしばであったという。中には卒業までツケで飲み喰いし、卒業式後に親御さんが息子の飲み喰い代を払いに来る者も一人や二人ではなかった。学生たちは気軽に飲ましてくれる店主に甘えていた。しかし、試験前に訪れる学生には絶対に酒は飲ませず、勉学に集中するように促し、一切売らないという徹底ぶりであった。試験終了後は浴びるほど酒をふるまい、仲居なども一緒になり夜中まで歌い語らい騒ぐのを許した。ある学生は、夜中までますやで遊び、徒歩で帰ったが、道中に歩き疲れて北野天満宮前の路上でますやの提灯を抱いたまま眠ってしまった。朝方、補導した警察からますやへ電話が掛かったが、店主は快く学生の身元保証人になったり、学生をゆっくり警察署で寝かしてもらおうように頼んだともいう。「親父たちは地方中学校出身者の多い三高生たちにとって、温かく見守り、また時には厳しく叱る「京都の親代わり」のような存在だったんやな。皆、ますやで酒の飲み方など「遊び方」を学んで大人になったようなもの」と商売を越えた絆の強さを語る。



写真6 今も当時の佇まいを残す ますや旅館

3.1 三高と一高の戦い

ますやと三高生を語る時に、欠かすことができないエピソードに「対一高！」がある。今もますやの玄関先の帳場には「三高・一高」という旧制高等学校二校の名が入る額が掛かっている。校章の下には「左京吉田・紅もゆる丘の花」、「本郷向ヶ丘・嗚呼玉杯に花受けて」とそれぞれの所在地と校歌が記されている。この額こそ当時、両校が激しい対抗戦を繰り広げた証だ。東京の一高と京都の三高は旧制学校制度が廃止される戦後まで、常に比較され、激しい対抗戦を繰り広げるライバル校¹⁹だった。両校は、野球や柔道、ラグビー、バスケット、ボートなどの運動部から文学発表や弁論



写真7 ますや旅館に掛かる三高・一高の額

部などの文化部に至るまで、あらゆる部活で対抗戦を繰り広げた。「ますや」では各倶楽部の会議や打ち上げ会など持たれ『打倒一高！』の拠点基地でもあった。森田氏は「うちでの宴会で一高への対抗心を鍛えますのや。『一高に勝つまでは卒業できへん！』とわざと留年して6年間、学校に残った筋

¹⁹ 東京大学の前身である旧制第一高等学校が「向陵」と呼ばれ、三高は吉田山麓にあることから「神陵」と呼ばれた。

金入りの者もいた。この対抗意識はなんと料理屋までにも及んだ。「一高は湯島『江知勝』で、三高は清滝の『ますや』と料理屋でも競争やった。」という話には、当時の両校の徹底した対抗意識を物語っている。後年、若き日に競いあった両校出身者同士が顔を会わせ、当時を懐かしむ宴会を持っている。また、ますやには、三高出身者が突然、一人で来訪することがあるという。清滝の山紫水明の風景、部屋の柱や襖に板の間の廊下、きしむ階段の音まで変わらないこの宿を再び訪ね、青雲の志を胸に青春を謳歌した若き日に思いを馳せるのだという。どこか懐かしい記憶をつなぐ力こそ清滝の潜在力だと感じる。森田氏はそれら三高生の同窓会名簿とスクラップ帳を大切に保管している。同窓会名簿には馴染みの客だった人物に赤い下線が引かれており、また新聞の切り抜きスクラップ帳には、卒業後の活躍が記されている人物の紹介記事を切り取り、貼りつけて大事に保管している。三高同窓会に森田氏がゲストとして招かれる関係も続いている。ますやと三高生の強い絆を結んだ清滝の古旅館での「若き魂たちの物語」は、間違いなく清滝集落の歴史が刻んだ貴重な財産である。今後も検証したい。

4. 清滝の活性化への行事と取り組み

旅館や茶店の廃業や若年層の流出により衰退しつつある清滝集落だが、何とかその流れを食い止めようと、市民団体が行事などの取り組みを続けている。また、一昨年、新たに出店したお店もある。

4.1 愛宕参詣の隆盛がよみがえる千日詣り

愛宕山信仰の宿場としての機能が低下した清滝が、一年で唯一にぎわうのが7月31日から8月1日に行われる「愛宕千日詣り」だ。山頂に鎮座する愛宕神社へ、日を継いで参拝すれば「千日（3年分）のご利益がある」と伝承され、山の参道と入口となる麓の集落・清滝には、全国から老若男女を問わず大勢の参拝者が訪れ、夜通しにぎわう。調査初年度となった平成22年（2010）、亀岡FSの河原林洋研究員とともに、愛宕千日詣りを体験した。清滝には、31日正午頃から参拝者が徐々に増え始め、夕方6時頃には、路線バスの清滝バス停留所から、道幅2mほど狭い坂道を下り、清滝



写真8 愛宕千日詣りの風景

集落の街道は人の行列で埋め尽くされる。参拝者の殆どは路線バスを使用する。約70台が収納可能な集落唯一の有料駐車場も夕方には満車状態だった。愛宕山信仰の底力を目の当たりにする光景だった。登山する際には登る者、下る者両者が「おのぼりやす〜おくだりやす〜」という昔ながらのあいさつを交わしながら励まし合う姿には、厳しい登山である愛宕詣りをする者同士の連帯感が参詣という宗教行事に今も息づいていると感じた。しかし、残念なことは、年中で一番賑わう千日詣りの時に集落の住民は殆ど関わりを持っていないということだ。夜通し家の前を歩く参拝客に対し、一部のお店を除き、家屋の扉や窓を閉め切り、接触する気配は感じられない。「もう茶店をするわけでもないの、いくら大勢がお越しになって騒がしいだけ…」という本音も聞こえてくる。一世代前には「大勢

また、一高が「自治」を校風に掲げたのに対し三高は「自由」を校風と掲げた。

がお越しになるこの日が勝負」と各店が清滝音頭（伊勢音頭の替え歌）などを披露し工夫を凝らし積極的な呼び込みをしていたことを思うとなんとも寂しい姿であり、心向きだと感じずにはいられない。

4.2 京都愛宕研究会の取り組み

愛宕神社御鎮座 1300 年記念行事（2003）の流れで、愛宕山にゆかりと興味を持つ市民有志で「京都愛宕研究会」が 2004 年に設立された。以降、愛宕山信仰及び愛宕山開発の歴史などを調査し、シンポジウムや書籍編集出版など市民レベルの活動を続けている。平成 18 年からは 7 月 31 日から 8 月 1 日に行われる「愛宕千日詣」に、清滝集落を盛り上げようと、茶店「なかや」店頭で、会独自で製作した登山用の杖や根付、「火廻要慎」ゴロ入り T シャツなどの「愛宕詣関連グッズ」を販売するほか、清滝川に掛かる渡猿橋両端に手作り灯籠を設置し、日常と異なる風情や情緒を演出するなど、清滝の風情を PR するイベントを続けている。また、出版物やチラシ等でも PR し「愛宕山鉄道の研究」や「愛宕山麓へのフィールドワーク」なども積極的に実施し、清滝の活性化に取り組んでいる唯一の団体である。ニュースレター「あたごさん」も創刊し文章によるアピールも実施している。しかし、集落住民の積極的な参加にまでは至らず、今後、どのように住民と活動の接点を見出し活性化に繋げていけるかが、重要な課題だといえる。



写真 9 千日詣りに愛宕研究会が設置する灯籠

4.3 ギャラリーテラ（Terra）の開店

平成 22 年 7 月、京都西陣地区からギャラリーテラ（Terra）が清滝に移転し開業した。

愛宕千日詣の前日にギャラリーをオープンした。店主夫妻は京都市内に居住し、清滝へ通うスタイルを取っている。一カ月ごとに陶器や染織など各テーマを決めたイベントを開催している。展示会のほか季節の食を楽しむ食事会や竹紙作りの講習会など来客者との交流イベントも企画、また店内には伝統工法で制作した「おくどさん」と薪ストーブが新設されている。特におくどさんに薪をくべてご飯を炊く、昔ながらの食事会は好評である。イベント開催期間は約 10 日間で、毎回、大勢の来客者がさまざまな地域から訪れ賑わっている。清滝に住むのではなく、仕事場として清滝の地を選ぶこのスタイルに、新たな人の行き来を生み出す形で集落再生の可能性を感じている。



写真 10 ギャラリーテラ（Terra）のイベント風景

4.4 清滝自治会・保勝会の活動

清滝では今でも町内自治会が存在する。以前は伝統行事として「山のかみさん講」「お日待ち講」「愛

宕講」「行者講」「伊勢講」「観音講」という代参講または部落講がある。「山のかみさん」は 11 月 9 日に会議所で行われている。会議所に「山の神」の掛け軸を掛け、松、南天、塩、米などを供え、ローソクに火を灯し年長者からお参りをする。他の講も簡略化されているが、今も集落で続く伝統行事だ。また渡猿橋左詰に鎮座する「清滝幸福延命地藏尊」前で「地藏盆」が 8 月 22、23 日に行われている。昭和 30 年度までは街道の真ん中に灯籠を立て、映画鑑賞会などの催しものなどが開かれ、深夜まで交流を深めていたが、現在は子供層がいないことと住民が高齢化したことで、静かに行われている。観光地として廃れ、経済的機能をみると衰退しているのだが、今でも地域の宗教行事を大切に守っている姿に、集落の根底に流れる精神的な強さを感じた。今年、離郷者の長老にあたる方が呼びかけ人となり「地藏盆に清滝に集まろう」という声を挙げて頂ける動きもあり、現・旧住民、また次世代の者が一堂に会するよい機会になればと期待しているところある。

4.5 保津川漁業組合の取り組み

清滝川は保津川の支流ということで、保津川漁業組合に属している。毎年、春にアユやアナゴの放流が行われている。夏にはアユの溪流釣りを楽しむ釣り人に人気がある。

5. 住民との聞き取り調査を終えて見えてきた問題点と展望

5.1 離郷者として自分と清滝の関わりと心の変化

(1) 故郷清滝との再会

そもそも、他所に住み、他所で職業を持つ私が、故郷清滝と再会するきっかけとなったのは清滝川を通してだった。川下り船の船士としてまた NPO 法人の理事²⁰として保津川の環境保全と流域地域の歴史・文化の検証活動を進める過程で、保津川の最大の支流である清滝川に関心を持った。特に平成 20 年より始まった筏復活プロジェクトの活動は、保津川水運を支えた各流域間の歴史や文化を掘り越し地域を繋ぐ展開となり、自然な形で支流の清滝川についても水運等の歴史的な検証調査へと関心が移っていった。清滝川はこれまで、保津川のように筏や舟運といった視点で語られることのない川であった。だが、上流には北山杉の産地中川や愛宕山周辺の山地には人工林の植林がされていることをみても、この川に水運が存在したことは容易に想像できる。この視点から水運の検証を進める為、清滝住民に聞き取り調査を行った。この調査の過程で衰退する故郷の現状を知るに至ったのである。

(2) 再生に関わる前段階として考えた集落再生プランの間違い

清滝の再生活動を始めることを決意し、私が注目したのは、第一に、今も京都有数の景勝地として大勢の来訪者が訪れていることであった。そして第二に、集落の起因が、農耕地を待たず、容易に人が住める環境でなかった地が、愛宕山参詣者の宿場まちとして形成されたという歴史的背景を考えても、集落再生の核となるのは『観光による活性化』しかないのではないかという点だった。「形成から栄華、そして衰退へ」という集落の歴史的変遷を辿り、住民の暮らしや文化、自然景観の調査する過程でも、多くの魅力的な地域資源が転がる「宝庫」だという確信が増し、この資源を有機的につなげ、観光振興の潜在力に転化することで同地の観光施策の機軸となるコンセプトが創出できるものと考えていた。その上で、住民や自治会との協力体制の構築に着手し、効率的で効果的な地域イメージつく

²⁰ NPO 法人プロジェクト保津川 副代表理事 保津川の環境保全と歴史文化の検証を実施。

り推進というプラン構想に向かい協力すれば「清滝の再生は必ずできる」と安易に考えていた。この考え方と手法は、私の本業である観光業者として目線や NPO 活動の経験の成功事例が強く作用していたことは否めない。

しかし、その考え方は、現地に赴き、実際に幾人かの地元住民との聞き取り調査を密にしていく毎に、間違いであることに気付く。聞き取りにより親しくなっていく毎に聞かされる本音は「もう、観光地はいらない」というものだった。今の住民が求めるものは、私が提案する「観光による再生」などというプランなどではなく「安心して住める静かな暮らし」であった。この思いに至る背景には「もう十分、観光地で頑張ってきた」という自負と「賑やかになることへの恐れ」あった。事実、数年前、夜中にやってきた若者たちによる花火が原因で火事が発生し、廃旅館が一棟焼失すること事件が起こった。さらに今も夜中にやってくる暴走族の騒音や火遊びに苦慮し、山峡の狭い地形に軒を連ねる集落住民を不安にさせている。そこに、大勢の人が集落に出入りすることを推進する観光集落計画など論外だったのだ。観光による産業の創出という「経済的な活性化」を思考して調査を進めていた私の実践活動は修正を余儀なくされることになる。以来、再生への具体的な実践活動を見出すことができないまま、集落へ通う日々をただ続けていた。

5.2 実践活動での気づきと今後の展望～

今回の研究では、昭和の高度成長期に離郷者が増え、衰退のきっかけとなった家族「出た者」が、住まいする他所から、故郷に関わる難しさや多くの気づきを私に教えてくれた。住民が今、最も望むことは、私が当初、考えていた様な「経済的な活性化」ではない。当初、私の視点は「観光で生まれた清滝をもう一度、活性化させるため必要なのは観光業の復興である。」→「そのためには地域に埋もれた潜在的な資源を発掘し、新たに再構築することで創出し活かしていく」という観光復興＝経済的な発展→集落の再生という図式だった。

その目的からの聞き取り調査を実施し「清滝に埋もれている資源を活かしましょう」というスタンスから、集落住民へのアプローチを描いていた。しかし、それは必ずしも住民の思いに一致していなかった。同地は集落発生以来、観光で生き、繁栄も衰退も経験した。その点では観光によるまちづくりを先取りしたような集落だ。住民の多数は茶店や旅館、旅籠を営業した経験を持ち、若い頃から働く親の姿、また自身も働いた。隆盛と衰退という観光で生きることの厳しさを知り尽くした人々だ。今、高齢を迎え「もう、十分やり尽くした」という意識は当然ある。そんな意識を持つ人々の中で、同地の集落再生をまた観光資源の活用でやろうというアプローチなど、後継者世代がほとんどいない現状の中で住民の思いには響かない。まして離村者家族の「出た者」が調査したから「提案します」的なプランだ。意識がずれるのは当然というものだ。

高齢化の進む集落で望まれることは、やはり「余生を安全にそして静かに過ごせる環境」なのだ。集落住民が望む思いを知ることができたのは、この地を故郷に持つ私にとって、非常に重要な聞き取り調査だったと思っている。

(1) 実践研究として、これからの関わりと展望

清滝の集落をするため実施した1年にもおよぶ聞き取り調査は、故郷清滝へ足向ける機会を多くつくり、また面識はあったものの、話をした事のない住民の人たちとも親しく話ができる関係を築けた。さらに離郷者の人たちにも知り合える機会を得た。もちろん、知り合うこと即、離村者である私を集落住民が受け入れたということではないが、話を聞きに行ける関係をつくれたことは何よりも大

きな成果だった。

また、この聞き取り調査で、私とふるさとの心の距離感が身近になり、精神的に深く結びついたと感じている。私自身のこの心の変化こそが、これからの故郷への関わる活力とモチベーションになる。

もうひとつ、聞き取り調査により重要なことに気付いたことがある。それは、出会った人たちが皆「清滝の話」をする時、とても楽しそうに語られていることだ。昔の清滝の姿や自身の思い出を語る皆さんの目は爛々輝いているのがわかる。かなり高齢の方も多いが、話をするといずれの方も若い頃に戻ったように、時が経つのも忘れたかのように、実に楽しそうに話をされる。これは現住民でも、離郷者でも関係がない。そして私のような次世代の者にも昔話は実に楽しいのだ。彼らのこの表情の中に、ふるさと再生へのヒントがあるのではないか。

「清滝への愛着」に関しては同じ思いを共有する住民と離郷者とのつながりを復活させ気軽に訪ねていき、話せる関係を構築すること、昔を直接知らない次世代の者が加わり、語り合う機会をつくれれば……そんな場ができれば、すぐに目に見える経済的活性化は望めないかもしれないが、お互いの「心の活性化」は再生され、その活力から再生への力が生まれるのではないかと期待が大きくなる。

(2) 清滝の本を作成～京都観光地から無視される清滝～

日本観光をけん引する京都には多くの観光地が存在し、書店には「京都本」とよばれる雑誌やガイドブックから文庫に歴史書までの書籍が多く並んでいる。その本に目を通すたびに、私はショックを受けていた。それは、どの本を観ても清滝に関する記述が一切掲載されていないことだった。マップやガイドブックでも清滝地域はカットされている。聞き取り調査でもわかるように、愛宕山信仰は比叡山にも匹敵する宗教文化があり、清滝はその影響を最も受け、生まれた特殊な集落だ。激動の変遷物語にも、検証すべき大事な教訓が潜んでいる。今まで存在しなかったのなら、参詣の道や清滝水運の実証等も含め、自然、歴史、暮らし、文化などを一冊の本にまとめ作成したい。出版できるかは問題ではなく、故郷清滝を語れる年代の方が存命のうちに、故郷の記録を編集し、書き留めておく必要性と他所の人達に清滝という集落を知ってほしいと強い願いが籠っている。

(3) 清滝と他所をつなぐ会の設立をにらんで

「故郷を再生したい」と離郷者である近親者をはじめ多くの旧住民に相談すると「やめた方がいい」という声が多く聞こえてきた。そもそも集落衰退の原因の一端をつくった当時者である離郷家族の者が、集落消滅の危機を知ったからといって、再生を訴えて活動を促しても、現住民に受け入れられるはずはない、という意見が大半を占めた。そして、この思考こそが現住民と旧住民の精神的な溝でもあり、これまで故郷との接点や繋がりを希薄してきた原因にもなっていた。ここが単純な地域活性化活動と大きく異なる集落の事情ということだろうが、狭い空間に軒を連ねて暮らしてきた近親者だからこそ抱く、複雑な心理というものは確かに存在するのかもしれない。しかし、これも案外、杞憂に過ぎないのではないかと私は感じている。平成 19 年に「清滝幸福延命地蔵」の修理寄進の呼びかけに、住民はもちろん多くの離郷者が協力を申し出てきた。その完成を記念して同年 11 月 3 日に「清滝在住者と旧清滝在住者・懇親会」がますや旅館で開かれた。そこでは幼児期から青年期まで過ごした離郷者と同世代の現住民とが同じ座敷に集い、清滝での思い出話に花が咲いたと聞く。歳月を重ねたお互いは、わだかまりなく昔話ができる年代になられたのではないか。私のような離郷者第二世代の者にとってはわだかまりどころか、自らのルーツを辿るかけがえのなく大切な場所だと感じる事ができる。

私は 2012 年春、在地の現住民と他所に住む「でたもの」の旧住民をつなぎ、また清滝の風情を好むファンをつなげることを目的とする会「(仮称) 清遊の里 清滝を愛する会」を創る。四季折々の風情を楽しむ場を持ち、集落の人から気軽に話が聞けるような緩やかな会にしたいと思う。もうすでに数名のメンバーが名乗りを上げてくれている。また、私の思いを受け、離郷者の長老の方が呼びかけ人となり「地蔵盆に清滝に集まろう」という声を挙げて下さった。以前の三高生の様に、今でも清滝を愛してくれる人は離郷者を含め、他所に大勢いる。これら他所の人と清滝の人をもう一度、つなげることができる機会づくりをにらんだ会だ。その会を継続する過程で、清滝集落消滅という問題なども回避できる、知恵や力が自然な形で生み出されてくるのではないだろうか。集落の人と他所の人々の心が通いあう交流を深めることで、連帯感が生まれ、近い将来、必ずこの人的つながりが再生への新たな知恵を生み出していくのではないかと期待している。

おわりに

清滝の集落で実施した 1 年にもおよぶ聞き取り調査は、私に故郷清滝へ足を向ける機会と故郷の人達と知り合う機会を与えてくれた。その中で、「清滝川の水運」について明記できたことは大きな成果だと思っている。さらに食糧を自給できない観光で生まれた集落が、自然環境や社会状況などの外的要因による変化にいかにか脆い基盤の上に成り立っているかを、集落が通ってきた歴史の中に垣間見たとき、食の自給力の重要性を感じずにはいられない。そして何より、私自身、頭で描いた集落再生プランが、現実に住民の思いに肉薄する思考へと変化できた。これらはすべて「訪れて話を聞く」という実践活動を通して気づかせてくれたことばかりだ。集落の人と直接会うことの大切さ、人と人が結びつく関係を構築することで生まれる自己の内的変革に、再生の糸口があるように感じられてならない。観光振興という「経済的な活性化」ばかりが集落再生のモデルではないはずだ。人同士がつながる機会を創出することで生まれる「心の活性化」にも集落再生の可能性があると思える。これを実証するにはもう少し時間が必要であろうが、私の故郷が清滝である限り、その時間は十分にある。

全国各地からやって来る愛宕詣りの参拝者をもてなし、文豪や学生を温かく迎え入れる風情と土壌を持つ清滝は、いつの時代も他所の人々とのつながることで生存してきた。

そんな清滝だからこそ、できる独自再生のモデルをぜひ、これから構築していきたい。

参考文献

- 飯田公 2007 年『愛宕山が一番賑わった頃～愛宕電車の 16 年～』 22-30 京都学園中学高校論集 36 号
- 右京区制五十周年記念会 昭和 58 年『右京区史』 京都市
- 京都市(編)平成 6 年『史料京都の歴史 第 14 巻右京区』14-27、37-48、438-530 平凡社
- 京都市役所 昭和 25~平成 22 年「京都市人口統計資料」
- 妹尾吉隆 昭和 12 年「清滝の起因」1-4 (取材ノート)
- 財団法人嵯峨教育振興会 平成 10 年『嵯峨誌』 200-201 財団法人嵯峨教育振興会
- 西野伸 平成 19 年『清滝の歴史』1, 3, 24, 25, 29, 38 清滝自治会
- 八木透(編)平成 18 年『京都愛宕山と火伏せの祈り』2, 3, 44, 45, 47 昭和堂
- 八木透(監修)鶴飼均(編)平成 20 年『愛宕山と愛宕詣り』88, 91, 92 佛教大学宗教文化情報研究所
- 吉田金彦著平成 15 年『京都の地名を歩く』82-85 京都新聞出版センター